

〔研究ノート〕

Jリーグ担当審判員の軌跡

——元プロフェッショナルレフェリー・松尾一——

赤 阪 修¹⁾

関 口 雄 飛²⁾

増 山 舜³⁾

要 旨

2023年12月14日、日本サッカー協会(JFA)は、プロフェッショナルレフェリー(PR)の松尾一が引退することを発表した。松尾の日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)主審担当数は通算582試合で、Jリーグ担当審判員(2024年3月時点)の中で歴代2位を誇る。松尾は、審判員に求められるスキルの一つ、マネジメントスキルに長けた日本のトップレフェリーとして知られていた。そんな松尾はどのように1級審判員となり、レフェリングスタイルを確立していったのか。本稿は、松尾が歩んできたサッカーとレフェリーの経験に迫ったものである。

キーワード：サッカー、Jリーグ、審判員、プロフェッショナルレフェリー

はじめに

2023年12月14日、日本サッカー協会(以下、JFA)⁴⁾は、プロフェッショナルレフェリー(以下、PR)⁵⁾の松尾一が引退することを発表した。松尾は、1997年にJFA公認1級審判員、2005年、2007年から2010年には国際審判員(主審)として登録されていた。2008年以降は、JFAとPR契約を締結し、日本プロサッカーリーグ(以下、Jリーグ)で通算582試合もの主審を担当してきた⁶⁾。この記録は、Jリーグ担当審判員(2024年3月時点)の中で歴代2位を誇る。

松尾のレフェリングスタイルについて、元プロサッカー選手の榎野智章は、2023年7月21日配信の「Jリーグジャッジリプレイ」の中で次のように語った。

松尾さんは、めちゃくちゃ自分のミスを認める方です。「松尾さん、今のファウル!」って言ったら、「ごめん、見えてなかったけど」とかちゃんと言ってくれる方です。だから、選手たちも気持ちよく、「次、見ててくださいよ～」って、そういうラリーができるわけです。

榎野の発言を受けて解説者として同席していた元国際審判員の家本政明は、松尾が「人間の心理にすぐ興味を持って」大学で心理学を学び直した事実を紹介し、出演者たちを驚かせた⁷⁾。12月1日配信の「Jリーグジャッジリプレイ」でも、家本は、松尾のレフェリングスタイルについて次のように解説し

た。

松尾さんはねー、松尾さんらしい、人間味のあるっていうんですかね。本当に受ける所は受ける、いなす所はいなす、あまり事を大きくしないために、巧く間をとる。松尾さん独特の聞いているようで聞いていないような。でも、ちゃんと無視はしない。本当にベテラン、味のあるパフォーマンスだったと思います。

ゲスト出演していた元プロサッカー選手の太田宏介も、「[松尾さんは、]たしかに凄く巧く流す。流しながら、でもしっかり聞いてコミュニケーションをとってくれる。そんな印象を持っています」と発言した。3者の発言に従えば、審判員には正確な判定スキルのみならず、適切な「ラリー」や「コミュニケーション」が可能なマネジメントスキル⁸⁾が要求されており、松尾はそのスキルに長けた審判員として認知されていた。そしてそのレフェリングスタイルの確立には、「人間の心理」への「興味」が関係していた。従来、審判員がレフェリングスタイルを確立するに至った経緯については、元国際審判員らがJリーグ担当になって以降の経験を自伝的に語る作業を通して示されてきた⁹⁾。だが、そもそも彼らがどのように1級審判員になり、いかなる環境のもとでレフェリングスタイルを確立していったのかについてはほとんど明らかにされていない。以上を踏まえて本稿は、松尾が歩んできたサッカーと審判の経験を辿っていくことを目的とする。その際、松尾以外の主要な登場人物の氏名はアルファベットで表記することとする。

なお本稿は、松尾一氏に実名でのインタビュー記録(2024年2月14日実施)の公表に関し許可をいただき、その上で内容の確認と加筆・修正をいただいた。松尾氏にはインタビューの内容をもとに作成した原稿に対し、事実確認も含めて多くのコメントと加筆・修正をいただいた。インタビュー及び原稿作成に多大な時間を割いてご協力いただいたことに対し改めて感謝申し上げます。有り難うございました。

I. サッカーとの出会い

松尾は、野球好きだった父の影響で小学1年生の時に野球チームに入った。野球は野球で楽しかったが、自分が「緊張しい」なので攻撃でも守備でも「ミスがはつきり」してしまうことが嫌だと感じるようになっていた。3年生だった1983年には、漫画『キャプテン翼』がテレビアニメ化されていて、日本にサッカーブームが到来していた¹⁰⁾。周りにもサッカーに夢中になる友人がだんだん多くなっていたので、松尾は、5年生の時に野球と並行してサッカークラブに入団した。

サッカークラブでは、松尾の友人の多くが主人公・大空翼らフィールドプレーヤーに憧れていて、ゴールキーパー(以下、GK)は「誰もやりたがらなかった」。ドッジボールが得意だった松尾は、案の定、入団直後にGKを任されるようになった。しかし「全然嫌ではなかった」。松尾は、フィールドプレーヤーよりも、むしろ「GKの方が面白いな」と感じた。気づけば、『キャプテン翼』の登場人物で赤いキャップがトレードマークのGK・若林源三に「格好良さ」を覚えるようになっていた。松尾は、「野球よりもサッカーの方が楽しい」、「中学校でもサッカー部に入るんだろうな」と思うようになっていた。毎週土曜日の練習後には、「サッカーを愛する皆さん、ご機嫌いかがでしょうか?」と始まるサッカー情報番組『三菱ダイヤモンド・サッカー』を観ていた。ただ、サッカーを勉強したいというよりは、学校での話題についていきたかったので観ていたようである。

中学校では、迷わずサッカー部に入った。部員は4,50人余りだった。GK・若林に憧れを抱いていた

Aug. 2024

Jリーグ担当審判員の軌跡

松尾だったが、体が小さいことを理由にフィールドプレーヤーへの転向を顧問の先生に勧められたので、それを聞き入れた。大阪・三島地区のある大会では上位進出を果たした。同級生の偏差値はまちまちだったが、松尾は、「高校でも一緒にやろう!」と誘われ、みんなと同じ高校に進学を決めた。中学3年生の終り頃からは、みんなで高校サッカー部の練習会に足を運んだ。高校では、副キャプテンを務め、運も味方して大阪府ベスト8に進出した。高校2年生からは文系・理系コースに分かれ、理系コースを選択した。松尾は、父親が技術職に就いていた影響でパソコンに関心があったので、大阪電気通信大学への進学を決めた。ただ、高校3年生の2学期頃からは不整脈の影響で少し走ると胸が痛くなった。引き続き、サッカー部には所属したものの、試合には出場できなくなり、「もうサッカーはいいかな……」と考えるようになった。

Ⅱ. 審判との出会い

大学進学後、松尾はやはりサッカーを続けなかった。だが、1回生の秋頃、帰宅途中にサッカー部が練習している光景をみかけたことでサッカー熱が再燃し、すぐに入部を決めた。ただ、その頃にはシーズンが終了していたので、活動開始は実質大学2回生以降になった。大学2回生のある日、松尾は自分がサッカーに出会った小学校の傍を通りかかった。グラウンドでは子どもたちがサッカーボールを夢中で追いかけていた。松尾は、自分にサッカーを教えてくれたA先生の姿が見えたので、およそ10年ぶりにA先生の元へと歩み寄っていった。何を話したのかは覚えていないが、A先生は別れ際に「またおいで」と言ってくれた。

松尾はその後、ボールを蹴るためにサッカークラブを訪ねるようになったが、次第に子どもたちにサッカーを教え、練習や試合などで審判も務め始めた。松尾は、審判を「積極的にやりたかったわけではない」が、審判は「嫌いじゃない」、「苦じゃない」という感覚で、何試合か経験していく内に、「ジャンケンで決めるくらいだったら、自分がその一枠をもらおう」と思うようになった。遂には、「楽しい」、「格好いい」という気持ちが芽生え、3級審判員資格の取得を目指すようになったという。松尾は、20試合ほど主審と副審を担当した後、昇級審査の受験資格が与えられ、3級審判員に認定された。

松尾が在籍していた大阪電気通信大学サッカー部は、関西学生サッカーリーグ(以下、大学リーグ)3部に所属していた。大学リーグの規定によれば、3部の試合は、1部所属のチームに在籍し3級審判員資格を持った学生が主審、帯同の学生が副審を務めることになっていた。松尾は、既に3級に昇級していたので3部の試合で「主審をしたかった」が、規定上それは叶わなかった。松尾は、審判活動への意欲と規定の間でもどかしさを感じていた。そんな時、大阪FAから初めての審判(主審)割当が届いた。割当てられたのは、40歳以上の選手が出場する試合だった。松尾は、試合前から「めっちゃくちゃ緊張していた」が、なんとか試合を終わらせることができた。試合後には、4種(U-12)の試合でしか審判を務めた経験がなく、「我流ではあったものの、それなりにできていると思っていたので、褒められるんだろうな」と思っていた。だが、元1級審判員Bさんによる試合後の振り返りでは、「全く褒めてもらえなかった」。むしろ厳しい指導を受けた。原因は、競技規則の理解が不十分で試合中断後の再開方法を誤った、いわゆる「適用ミス」だった。松尾は「審判を甘く見ていた」。Bさんの指導を受けて松尾は、「なるほど! そうなんだ!」と思いつつも、「え、なんで審判してるのに厳しいコメントされなあかんの? 別にそんな向上心があるわけでもないのに……」と少し戸惑いを覚えた。松尾にとってこの試合は、審判活動が「ちょっと嫌になった」出来事だった。とはいえ、「強くではない」が「頑張ってみよう」と思った。

Ⅲ. 上級審判員への憧れと苦悩

3回生の終り頃、松尾は、部を通じて関西FA主催「レフェリースクール」の案内を受け取ったので、申込んでみた。レフェリースクールとは、トップレフェリーを目指す意欲的かつ若い世代の審判員の育成を掲げる組織だった¹¹⁾。スクールは、数か月間の研修会(月2回)を受講し最終試験に合格すれば修了が認められ2級審判員候補となり、インストラクターによる実技指導(2試合)を経て2級昇級審査を受けることができる制度だった。3級のワッペンは「Referee」の文字が赤色だったが、2級のワッペンは紺色だった。松尾は、「あの紺色が格好良い」と思った。1級のワッペンはおそらく国際審判員のワッペンに倣ってひとまわり大きかった。松尾は、「あのワッペン格好良いな」、「1級を目指したいな」と、上級審判員への憧れを抱くようになっていた。

松尾は、「最初はレフェリースクールに意気込んで」出席した。だが、スクールが始まって間もなく、在籍メンバーが大学リーグ1部のチームに所属している審判員ばかりであることに気づいた。松尾は大学リーグ3部の「弱小」チームに所属していたので「恥ずかしく」、他の学生とは「恐れ多くて」何も関わりがなかった。研修会場(三ノ宮の兵庫FA)へと向かう電車を梅田あたりで降りて自宅に引き返したこともあった。研修会に出席したとしても、机上の大学名と氏名が記載されたプレートを伏せて受講していた。出席日数は「ぎりぎり」だったが、なんとかレフェリースクールを修了し2級審判員候補になることができた。

大学4回生も後半に差し掛かった頃、松尾は就職が決まっていた。ある日、指導をしていたクラブの練習試合会場で、先輩が「朝礼台のパイプ椅子に座っている人がC先生や。審判を続けていくんやったら挨拶しておいた方がいい」と助言してくれた。松尾は「恐る恐る」挨拶をするためにC先生に近づいて、「C先生、松尾といいます」と話しかけてみた。C先生は、レフェリースクールを修了したマツオという大学生が茨木市内のチームで指導していることを知っていたらしく、「お前があの松尾か!」という反応をみせた。松尾が「大学卒業したら審判やりたいんです」と打ち明けると、C先生は「審判やるんやったら土日つぶれるから遊ばれへんぞ」と言われ、「少し突き放された感じ」がした。松尾は、部活に明け暮れ土日に遊んだことがあまり無かったので、来年からは「土日は遊べる、自由な時間が過ごせる!」と考えていた。松尾は、「そんなに厳しい世界だったらやめておこうかな……」と思い、「(審判を続けるかは)少し考えさせてください」と一旦その場を後にした。ところが結局、C先生の勧めで大阪FA審判委員会(4種)に入れてもらい、主に4種の試合の審判を担当するようになった。C先生は松尾のレフェリングをたくさんアセスメントしてくれたが、松尾は「試合が終わったら何を言われるんだろう?」と試合中から「びくびく」していた。ただ、審判委員会(4種)の委員だったC先生は、松尾がいないところで「松尾が良い、松尾が良い」と他の委員に推してくれていたようだ。背中を押し続けてくれたC先生は、「父親の次ぐらいの存在」になっていた。

松尾は大学を卒業して間もなく、1995年に2級審判員昇級試験を受験し合格した。1995年の関西FAでは、多くの2級審判員が誕生した。特に松尾が所属していた大阪FAでは、1年後の1996年に全国社会人サッカー選手権大会、2年後の1997年に第52回国民体育大会(以下、国体)を控えていて、副審を担当することができる2級審判員の育成及び強化が図られていた。松尾は、2級昇級後ほどなく、1級審判員候補に相当する強化カテゴリーに選出された。もう審判活動に「どっぷりと」浸かっていた。1年間の強化期間を終え、1996年に関西1級審判員候補として選ばれた。

1級審判員候補として臨んだ1996年シーズンは、「いろんな人からいろんな事を言われ」苦しいシーズンを過ごした。上手くいっていない時期は「あいつは下手だ、まだ1級は早い」、上手くいっている時期は「あいつは調子に乗ってる」という噂が耳に入ってきた。応援してくれるインストラクターからは「お

Aug. 2024

Jリーグ担当審判員の軌跡

前は絶対1級になるんだって魔法をかけられ」たくさんの指導を受けた。松尾も「そうなる。もうそうなるべき。」、「1級にならんとあかん」と考えるようになっていた。その結果、松尾は、全ての事象がファウルに見えたり、全ての事象がノーファウルに見えたり、自分でも「何をやっているかわからない状態」に陥ってしまった。

IV. 1級, J担当, 国際, そして, プロへ

1997年シーズン、松尾は、1級昇級試験の1次試験(デンソーカップ/福岡県)に臨んだ。試験試合前夜の個人面談は、レフェリースクール講師D先生が担当だった。D先生は、映画俳優のチャールズ・チャップリンが、「あなたの最高傑作は何ですか?」という質問に対し「The next one(次の作品さ)」と答えたエピソードを紹介してくれた。D先生は、「審判も一緒だよ?」と、レフェリングに完璧は無いという考え方を教えてくれた。松尾は、「one」と名前の「一(はじめ)」が繋がりに「自分のことを言われたと思った」ので、それ以来、「The next one」という言葉を大切にするようになった。

松尾は、1次試験、2次試験(U18クラブユース選手権大会/福島県)と無事に通過した。だが、2次試験後はアセスメントの結果が良くなかった。松尾は、自分のレフェリングをめぐって「混乱」し「苦しい時間」を送った。拳句の果てには、「何をやっているのかわからない状態」に陥ってしまった。3次試験1か月前の試合では、3年前、初めての審判割当てで厳しい「指導」を受けた元1級審判員のBさんに「審判から離れてみたら? テニスとか?」とアドバイスももらった。3次試験までの1か月間はトレーニングを続けたが、Bさんのアドバイスに懸けて、試合とは完全に距離を取った。3次試験1試合目はまずまずの出来、2試合目は涙で前が半分見えなくなるほどのミスをしてしまったが、合格することができた。

松尾は、1997年12月、25歳の時に1級審判員として登録された。2年目まではLリーグ(現WEリーグ)の主審とJFLの副審を数試合、全国大会を担当した。3年目の1999年からはJ2リーグが開幕したため全ての1級審判員がJ2副審以上の担当になった。松尾もJ2副審担当に昇格した。J1副審担当でなければJFLの主審を担当できなかったため、J1副審担当に昇格することが目標だった。2001年からはJ1副審担当、2003年後期からJ2主審、2004年からはJ1主審担当に昇格し、2005年からは国際審判員(主審)として登録された。

J2のデビュー戦では、JFAチーフレフェリーインストラクターEさんがアセスメントをしにきてくれた。周りからも「今が頑張り時やぞ!」と声を掛けられていた。Eさんには「及第点だ」と言われた一方、「異議に弱い」や「遅延行為に甘い」との指摘も受けた。1週間後の試合では、Eさんからの指摘を徹底的に実践した。その結果、Eさんからは「素晴らしい」、「この調子でいったら、将来国際になれるぞ!」と褒めてもらった。だが、松尾としては「パツとしいひんな」という感じだった。「言われた通りにやっているだけ」だった。1級審判員から国際審判員になるまでの8年間は、「松尾はいい!」、「松尾は駄目だ!」などと「いろいろな声」が耳に入ってきていた。「自分は自分でやるからほっといてほしい」と思っていたが、「評価と向き合わざるを得なかった」。レフェリングを評価する審判アセッサーや評価点ばかりが気になっていた。レフェリーとしてみるべき「選手」や「大切なもの」はあまりわかっていなかった。

松尾は、2005年の国際審判員登録と同時に、JFAからスペシャルレフェリー(以下、SR)¹²⁾契約の話ももらった。だが、幼稚園教諭に決まっていたので、「数年後もその立場にいるようであれば、もう一度声をかけてください」と断った。3年後の2008年、再びJFA審判部からSR契約の話ももらい、引き受けた。「素直にやりたい!」と思った¹³⁾。SR契約を締結した以上、レフェリーのみが仕事になるので「もっと上手くなるしかなかった」。SRは自己表現力が高く、「ザ・リーダー」みたいな人たちの集まりだった。それに比べて松尾は、「あんまり前が出るタイプではなかった」。みなさんからは冗談交じりに「松尾は何

を考えているのかわからん」とよく言われたが、それを聞いて余計喋れなくなったり、無理して喋って「しんどい」気持ちになったりして、「苦勞」した。

V. レフェリングスタイルの確立

SRは、契約後の2年間は1か月に1回国立スポーツ科学センター（以下、JISS）でメンタルトレーニングを受けることが必須とされていた。松尾も、2008 - 2009年シーズンはそのメンタルトレーニングを受けており、3年目以降も希望して継続してもらった。この頃には「人間の心」へと自らの関心が向き始めていたのかもしれない。2010年11月30日付の『朝日新聞』では、JFAトップレフェリーインストラクターのアラン・ウィルキーが、「プロ3年目の松尾一主審の成長も著しかった。取り組んできた主な課題は選手との接し方。小さな違いが重要だ」¹⁴⁾と、松尾が「選手との接し方」という課題に取り組み「著しく「成長」したことを証言している。その後、担当スタッフとJISSとの契約が満了になってしまったので、関西でメンタルトレーニングを受けられる場所を探した。担当スタッフのセッションは語りを中心としたものだったので、関西では臨床心理士によるカウンセリングを受けてみたいと思った。前職幼稚園の園長に相談した結果、園の研修会などでお世話になっていた臨床心理士のFさんを紹介してもらい、カウンセリング（月1回）を受け始めた。Fさんとの出会いは、後に、放送大学や武庫川女子大学大学院での「人間の心」に関する学びへと繋がっていく。

PR5年目、2012年シーズンのある試合での経験を通して、松尾は自分のレフェリングスタイルを見つける。試合中のある行為をめぐって両チームが入り乱れ、試合が一時騒然とした。主審の松尾は、その事象が生じる前のいくつかの反則に対し適切な判定が下せていなかったで、「自分が揉め事を起してしまったな」という思いを強く持って、とにかく試合を落ち着かせようと必死だった。松尾は、入り乱れた集団から対立を引き起した選手を引き離し、両チームの選手たちを落ち着かせた。試合後、審判委員長Gさんが、「[選手の]別け方が上手いな！」と電話をくれた。どちらかといえば、「やっちゃった」という心情だったので「怒られるかな」と思っていたし、「判定の正誤しか評価されない」というイメージが強かったので、「マネジメントも認めてくれるんだ」と認識に変化が現れた。以来、松尾は、選手、チームスタッフ、観衆の注目がどこに向いているのか、言うなれば「興味が人を動かすんだな」と意識し始めた。

翌2013年シーズンのある試合では、松尾の視野外で両チーム選手間の小競り合いが起こった。「レフェリー!!!」。選手、チームスタッフ、観衆の「興味」が松尾へと集まってくるのがわかった。しかし間も無くして、皆が「あれ松尾見てないな」と気づいた。「誰か見てないんか!?!」と皆の「興味」がさまよ始めた時、副審1のHさんが旗を上げてくれた。「暗闇の中にいる時にポッと光が、明かりが灯った」ようだった。「あそこに行ったら何かわかるぞ!」。皆の「興味」がHさんへと移っていった。松尾も「助かった」と思いつつHさんの元へと向かった。Hさんは正確な情報を松尾に提供してくれた。松尾は、Hさんと協議を行った後、第4の審判員にも判定を共有し当該選手を呼んで最終的な判定を下した。Hさんがともしてくれ「提灯」の灯りを自分が受け継いで、自分の「提灯」に選手が付いて来る、そして自分が最終的に判定という形で表現する、という流れが最も「すっきり」と考えた。ただ、マネジメントに対する松尾の意識はまだそれ程強くはなかった。随分後になって「あの時間の取り方がいいですね!」などと周囲の人々に言われて初めて、確かに「自分は時間をかけてるな」とか「ただ単に試合を止めているだけじゃないな」と腑に落ちるのだった。

例えば、人それぞれが持っている「興味」が「応援の仕方」に反映される - 観衆の「ブーイング」が「チャント（応援歌）」へと変わっていくシーン - と考えれば、自然と「自分には何が求められるんだろうな」ということへのヒントが出てきた。つまり、「まだ言いたいことがあるから始めるなよ!」というのが

Aug. 2024

Jリーグ担当審判員の軌跡

ブーイングで、「チームの未来に関して見たくなくなってきた！」というのがチャントだ。自分がピッチで感じ取ることができる人々の「興味」に「乗っかる」ことができれば、結果として、「パワーがいらないんだ」と気づいた。2012年のある経験は、「びびりで、気にしい」な松尾の意識が審判アセッサーや評価点ではなく、選手、チームスタッフ、そして、観衆に向き、「無機質な」レフェリングが変わり始めるきっかけだった。

VI. 笛を置く時

松尾は、大学院を修了する45歳までは「現役を続けたい」と考え、それ以降は「いつ終わってもいい」と考えていた。2023年シーズンの最終節、12月3日のアルビレックス新潟vsセレッソ大阪の試合が最後の主審となった。試合当日は「比較的落ち着いていた」。J1担当主審になって以来、20年余り続いた試合当日の朝、スタジアムまでの移動、審判控室での会話、入場、キックオフ、試合と何一つ変わらなかった。試合中、残り10分間くらいは、今までの色々な出来事をいわゆる「走馬灯のように」思い返していた。残り5分を切った頃、突如、インカムから「松尾さんの最後の試合と一緒に担当することができて私は幸せです！今までありがとうございましたー!!!」の声が聞こえてきた。松尾が「誰が言ってくれたん？」と聞くと、「Iです！」と応答があった。副審2のIさんだった。「ああ、そうやなあ。終わっていくんやなあ。」と実感した瞬間だった。試合終了の時刻を迎えた。最後の笛は特に強く吹くわけでも長く吹くわけでもなかったが、「審判としてのキャリアはこれで終わり！」という思いを込めて吹いた。

試合前には、「もうちょっとやれるんちゃうか」とか「辞めるのをやめるって言いたくなるんちゃうか」という気持ちになることを心配していたが、終了後は「すっきり」していた。帰宅後、家族からは「お疲れ様！」と言ってもらった。多くの仲間からも個人的に連絡をもらった。JFA、関西FA、大阪FAの先輩たちには、自分で連絡を入れ、労いの言葉をもらった。松尾は、審判とは「自分を成長させるひとつのツール」だと言い、以下のように語った。

あまり表に出たくない性分の自分が、どうして結果的に長い間たくさんの人の前に出ることを続けられたのかを現役中にいろいろと考えることがありました。どちらかと言えば話し下手な自分が、「笛やカード（だけではないと思いますが）」を使って素直な自分を表現して選手、チームスタッフ、サポーターのみなさんと繋がれることを楽しんでいたのでと思います。自分が表現することによって周りが影響され、それを見て自分もまた影響される。私はこうした相互関係を楽しんでいたのかもしれませんが。もちろん正しい判定が審判員に求められていることを重々承知し、正しい判定を下すために最大限の努力を積み重ねてきましたが、それだけだったらもっと早く辞めていたかもしれません。現役を終え、また違った形でこの相互関係を改めて経験していくのだと思います。

松尾は、2024年2月、関西FAとJFAの「橋渡し役」を担うJFA審判ディプロップメントオフィサー(RDO)に就任し、審判指導者養成や審判員育成を進めていくこととなった¹⁵⁾。松尾は、審判指導者という後半戦で今日も「人間の心」と向き合っているに違いない。

おわりに

松尾は、友人の影響でサッカーを始め、『キャプテン翼』のGK・若林源三に憧れた。中学校では顧問の先生の勧めでフィールドプレーヤーに転向し、同級生の誘いで同じ高校へと進学した。技術職に就いて

いた父の影響で選んだ大学では、2回生以降、選手と帯同審判員という2足の草鞋で活動を始めた。松尾が審判を始めたのは、ある日約10年ぶりに小学校時代のコーチA先生の元を訪れ、「またおいで」と言ってもらったことで、子どもたちにサッカーを教え審判を担当する機会を得たためであった。3級審判員としての初割当では、元1級審判員Bさんに松尾の審判に対する短絡的な考えを浮き彫りにされ戸惑ったが、もう少し続けてみようという気持ちにもなった。松尾は、そのシーズンの暮れに所属チームの主務に声を掛けてもらいレフェリースクールに申し込んだ。この頃には上級審判員への憧れを抱くようになっていた。

レフェリースクールでは、在学生のほとんどが大学リーグ1部のチーム所属であったが、松尾は3部のチーム所属であったために忸怩たる思いで過ごした。松尾は、出席回数はギリギリで、他の審判員とかかわることも無かったが、なんとか修了し2級審判員候補になった。松尾は、大学卒業間際に出会ったC先生に審判員としての在り方を教えてもらい、4種の試合を中心にたくさん指導をしてもらった。松尾にとってC先生は「父親の次ぐらしい存在」になった。松尾は、大学卒業後、大阪FA及び関西FAインストラクターの後押しで2級審判員に昇級し1級審判員候補に選ばれた。松尾が1級審判員候補として臨んだシーズンには、松尾のレフェリングに対する良悪双方の噂が耳に入ってくるなかで、応援してくれるインストラクターにたくさん指導をもらった。松尾は、かえって混乱し自分のレフェリングを見失ってしまった。「1級審判員になりたい」という松尾の純粋な夢は、大阪FA及び関西FAインストラクターの期待が加わったことで「1級審判員にならないといけない」という使命になっていた。松尾はその使命を果たすべく藻掻いていた。

1級昇級審査1次試験前夜の面談で松尾は、レフェリースクール講師Dさんにチャップリンの名言を紹介してもらい、レフェリングに完璧は無いという考え方を教えてもらった。1・2次試験を通過したものの3次試験前に不調に陥った松尾は、3年前に初めて審判への姿勢を教えてくれた元1級審判員Bさんに一か八かのアドバイスをもらい、半ば懸ける形で実行したことでなんとか合格することができた。松尾は、1級6年目のJ2主審デビュー戦でJFAチーフレフェリーインストラクターEさんに合格点と2つの課題をもらった。松尾は、1週間後の試合で2つの課題に徹底的に取り組んだ結果、Eさんに高く評価された。松尾は、半期でJ1担当主審に昇格、国際審判員(主審)にも登録され、3年後にはJFAとプロ契約を締結するに至った。こうした、順調にみえる国際審判員登録までの8年間は、しかし松尾にとっては決して順風満帆とはいえなかった。松尾は、審判アセッサーや評価点ばかりが気になってしまい、レフェリーとしてみるべき「選手」や「大切なもの」があまりわかっていなかった。

松尾は、プロになって以降、JISSスタッフや臨床心理士F先生とのかかわりを通して「人間の心」に関心を寄せ、学びを深めていった。松尾は、プロ5年目のある経験を通して自分のレフェリングスタイルを発見した。松尾は、両チームの選手が入り乱れる事態に対し見事なマネジメントを披露し、審判委員長Gさんにその能力を高く評価してもらった。松尾にとっては、判定力のみが評価されると思い込んでいたため、マネジメント力も評価されるのだと認識が変わった瞬間であった。松尾のなかで、レフェリーとしてみるべきものが審判アセッサーではなく選手、チームスタッフ、そして観衆へと向き始めていた。「興味を人を動かすんだな」。松尾が悩み続けた「無機質な」レフェリングスタイルは少しずつ変わり始めた。松尾は、レフェリーとしてみるべき「大切なもの」もだんだんとわかってきた。そして、プロ6年目のある経験を経てその「大切なもの」とは何かがはっきりとわかった。松尾は、選手、チームスタッフ、観衆の「興味」に目を向け耳を傾けたことで、両チーム選手間の小競り合いをスムーズに収めた。松尾にとって、レフェリーとしてみるべき「大切なもの」とは「人間の心」だったのである。2023年12月14日、引退を迎えた松尾は、JFAを通じて以下のコメントを発表した¹⁶⁾。

Aug. 2024

Jリーグ担当審判員の軌跡

今シーズンをもって1級審判員としてのキャリアを終えることになりました。これまでフィールドの内外を問わず、たくさんの方々にご助けいただきました。その時にかけていただいた言葉や関わりは私の大切な宝物です。そして、その言葉や関わりが私の心と体を前へ前へと進めてくれました。本当にありがとうございました。

松尾にマネジメントの道標を示してくれた選手やチームスタッフ、サポーター、松尾を常に援助してくれた審判団、背中を押し続けてくれたJFAや関西FA、大阪FA、地元の仲間、そして、家族の「言葉」や「関わり」が、松尾の「心と体を前へ前へと進めてくれ」たのであった。

注

- 1) 阪南大学流通学部
- 2) 日本体育大学オリックススポーツ文化研究所
- 3) 中央大学保健体育研究所
- 4) FAとはFootball Associationの略称である。したがって本稿では、大阪府サッカー協会を大阪FA、関西サッカー協会を関西FA、兵庫県サッカー協会を兵庫FAと表記している。
- 5) JFAは、日本のトップレベルの審判員が国内外の試合で安定して高いレベルのパフォーマンスを発揮することができるように「プロフェッショナルレフェリー制度」を導入している。
- 6) <https://www.jfa.jp/referee/news/00033430/>「松尾一審判員が今シーズンでトップリーグ担当審判員から勇退 | JFA | 公益財団法人日本サッカー協会」(採録日またはアクセス日：2024年3月31日)
- 7) 松尾は2006年3月に放送大学教養学部心理と教育コース、2021年9月に武庫川女子大学大学院文学科臨床心理学専攻を修了している。
- 8) JFAは、審判員に求める4つの技術として、①判定スキル(争点を予測し、現象を的確に見極め判断する)、②ポジショニングスキル(対角線式審判法に基づき展開や状況に応じて動く)、③運営スキル(競技規則の正しい解釈及び適用を行う)、④マネジメントスキル(「気づき」を働かせる)を掲げている(審判員とは? | 審判 | JFA | 日本サッカー協会)。
- 9) 元Jリーグ担当審判員に関する著作としては以下を参照。上川徹(2007)『平常心：サッカーの審判という仕事』ランダムハウス講談社。高田静夫(2008)『できる男は空気が読める：サッカー審判に学ぶ「英断力」』、ベースボール・マガジン社新書。家本政明(2010)『主審告白』東邦出版。
- 10) 鈴木良韶「子供たちがサッカーボールで遊び始めた！黄金世代のルーツ、『キャプテン翼』ブームの到来」『日本サッカー狂会』、国書刊行会、p.100。
- 11) 2024年3月現在、レフェリースクールは、「将来トップレフェリー(1級審判員・女子1級審判員、さらにはJリーグ担当やWEリーグ・なでしこリーグ担当審判員あるいは国際審判員)を目指そう」という意欲的な若い世代の審判員を育成するために、また競技規則や審判法について理解を深めもっとレフェリングを楽しみたい審判員のために」開講している(関西サッカー協会 レフェリースクール 2023/2024 受講生募集のご案内 | 審判委員会 (osaka-fa.or.jp))。
- 12) SRは、2009年にプロフェッショナルレフェリーと名称変更した((2009-02-05)プロフェッショナルレフェリー3名と新たに契約 | トピックス | 指導者・審判 | 日本サッカー協会 (jfa.or.jp)) (採録日またはアクセス日：2024年3月31日)。
- 13) https://www.jfa.or.jp/archive/jfa/news/news/080115_05.html「JFAニュース：東城稯主審、松尾一主審、村上伸次主審の3名が新スペシャルレフェリー(SR)に就任」(採録日またはアクセス日：2024年3月31日)
- 14) 「日本人でなく審判になれ：Jリーグで1年半指導したウィルキーさん」『朝日新聞』2010年11月30日付、p.23。
- 15) https://www.jfa.jp/samuraiblueworldcup_2022/news/00031885/「JFA news 2023年2月号」(採録日またはアクセス日：2024年3月31日)
- 16) <https://www.jfa.jp/referee/news/00033430/>「松尾一審判員が今シーズンでトップリーグ担当審判員から勇退 | JFA | 公益財団法人日本サッカー協会」(採録日またはアクセス日：2024年3月31日)